

マタイによる福音書 20章1節～16節「ぶどう園の労働者」のたとえ

1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはいけません。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたのではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

マタイ福音書において、天の国のたとえとして、18:21-35「仲間を赦さない家来」に後続するのが、この比較的長い「ぶどう園の労働者」のたとえです。

一体どんなことが、天の国に入るのにふさわしい者として、私たちに求められているのでしょうか？

直後の三度目の「イエスの死と復活の予告」（マタイ20:17-19）との関連で言えば、私たちが、神のぶどう園の良き労働者であるように、そしてまた、主人であるイエス・キリストの十字架と復活を無償の恵みとして受け止め信じる礼拝者であるようにという使信が明白です（「労働」と「礼拝」の連関については後で説明します）。

さらに、このマタイ福音書20章で、主イエスが決然と「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く」（20:18）と宣言されていることに呼応して、私たちもまた、そこで十字架と復活を目撃し、証言する目的において、旅に出で行くことが求められているのではないのでしょうか。今の信仰者である私が「目撃し、証言する」というのは、キリストによる救いの出来事が、私のためであると信じ、感謝をもってそれを告白するということです。

マタイ福音書20:16——

このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。

エルサレム上りの旅路において、まさに神による大逆転が引き起こされます。へりくだる者こそ、神の謙卑の極みである十字架の丘へと急ぐ者となります。夕方5時から一時間しか働けなかったという自分の弱さと乏しさと惨めさとを、主にあって受け入れる者こそ、先頭に立ちます。

マタイ福音書20:1――

天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。

この主人は、繰り返し外へ出かけます。主人は、迷い出ている者や徘徊している者の「逃亡責任」を問うことなく、一人ひとりを探しに行きます。広場へ出かけること、20:1 夜明け、:3 9時、:5 12時と3時、:6 5時^{のほ}と5回^{のほ}に上ります。

私たちは、このような主人の忍耐強さのうちに、貧しい者たちへの深い憐れみがあることに気づかされます。しかし同時に、勘定高い人々は、夕刻5時に人を雇い入れることの意味を問いたくなるかもしれません。そんな時刻に広場に突っ立っていた人は、怠け者なのではないかとか、あるいは、そんな時刻の新規雇用はぶどう園の労働作業全体の妨げになるのではないかとか、批判したくもなるでしょう。

それに対し、この主人は、人の存在そのものの尊さを見つめています。すなわち、人が自分のぶどう園でどれだけ働けるかではなく、人が主人との関係を回復し、主人のもとで働くこと自体に尊い価値を認めています。

マタイ福音書20:3――

また、九時ごろ（主人が）行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、

マタイ福音書20:6――

五時ごろにも（主人が）行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、

主人との関係回復という観点からみると、広場にいた人々の「何もしないで」という姿勢は意味深長です。その点に含蓄のあることは、逆の姿勢を振り返ると分かります。

金持ちの青年 マタイ19:16-22についての注解から――

一人の男、青年は、財産において富んでいた（19:22）ばかりでなく、律法的努力への熱心（19:20）においても富める人であった。（高橋三郎）

一口で言えば、この金持ちの青年は、何事においても……聖俗双方の領域で……一生懸命であり、ある意味、働き過ぎていました。彼の頭は満杯の状態、心は二つに切り裂かれるほどに多忙であったことでしょう。結果として、彼は主イエスと出会いながらも、「悲しみながら立ち去った」のでした（マタイ19:20）。その点で、哀れにも「何もしないで」いた人々は幸いでした。

人は心^{から}が空の状態のとき、心が貧しいとき、その人には神に向き合い、神の言葉を聴く用意がなされています。じっと「立っている」（マタイ20:3,6）という姿は、まさに準備態勢をあらわしています。「ぶどう園に行きなさい」、すなわち、「来よ」との神の御声を聞いて、広場の人々は神に近づいて行きました。

主人は、市^{いち}の立つ広場のさまざまな誘惑に負けることなく、一日中、立っていた人々を憐れみました。その主人の憐れみ深い言葉と行動に、主イエスの山上の説教が響き合っています。

マタイ福音書5:3――

心の貧しい人々は、幸いである。

天の国はその人たちのものである。

山上の説教と「ぶどう園の労働者」のたとえで告知されている「天の国」は、キリストによって、心の貧しい人々はじめ、あらゆる人が「行って働く」よう招かれているところです。

元々、「わたしたちの国籍は天にある」（フィリピの信徒への手紙3:20 口語訳）とある通り、「天の国」は、私たちが「帰って行く」ところです。そのことは、このたとえの用語、ぶどう園に「行きなさい」（マタイ20:4,7）や「出かけて行った」（同上20:5）が「行く」よりもむしろ、「引き返す」や「去る」という原意を持っている点からも裏付けられます。

一日を終えた時に、また、この世の生涯を終えた時に、私たちの「帰って行く」ところが^あ在る、それが「天の国」である……これこそ私たちに対する、神の「気前の良さ」、寛大さ（マタイ20:15）です。

天の国へとあらゆる人が「行って働く」よう招かれているといましたが、神のぶどう園（イザヤ書3:14、5:1-7、16:10）によって暗示されている天の国において「働く」とは、ヘブライ語の「働く」＝「礼拝する」に証示されているように、「神を拝み、神に仕える」ということです。私たちの身と魂を献げ、神のためにさまざまな形で為される私たちの「働き」の基盤として、最も霊的な「働き」＝礼拝が据えられているということです。その一つの霊的な「働き」、礼拝の故に、私たちがさまざまな職業や奉仕において働くことのできる「働きがい」が湧いて来るのではないのでしょうか。

神のぶどう園の作業では、第一に礼拝することであり、祈ることですから、「自分のような者が働けるかどうか？」とか「天の国でも働くの？」とか問い尋ねることは、思い患いに過ぎません。

マタイ福音書20:13-14——

¹³ 主人はその（最初に雇われた人の）一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。¹⁴ 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。』

ここで、主人、すなわち、主イエス・キリストは、二通りの人々と出会っておられます。片や、「最初に雇われた人」で、この語りかけにおいて、親密に「友よ」と呼びかけられている人、また片や、「この最後の者」で、主イエスが前者と「同じように」接しようとしてされている人です。

主イエス・キリストは、全く別の状態、つまり、神と隣人との関係において異なる問題を抱えている人々に、公平に交わろうとされています。

なぜでしょうか？

それは、「最初に雇われた人」も「この最後の者」も、まだほんとうには、主人を見出せていないから、ではないのでしょうか。

一方、「この最後の者」は、「何もしないで」という姿勢を保ちつつも、主人の選びと招きに応える機会を失っていました。神のぶどう園で働き、神を拝む恵みにあずかっていなかったのです。

他方、「最初に雇われた人」は、労苦してぶどう園で働きながらも、夕暮れから新しい日へという巡りの中で、挫折してしまいました。その人の内から、主のよみがえりの朝とも言える「夜明け」におけるキリストとの出会い（ヨハネ21:4）、初めの愛が枯れ果ててしまいました。本来ならば感謝をもって神にゆだねるべき「熱い中を辛抱して働いた」、まる一日の労苦（マタイ20:12及び6:34）が、不平の種となりました。その一つのきっかけ

が、「放蕩息子のたとえ」（ルカ15:11-32）の兄のごとく、自分と隣人、自分と兄弟を比べたことでした。確かに人の目には、早朝からの12時間労働と夕刻からの1時間労働の「差」は歴然としています。

そうして、「最初に雇われた人」の内に周りの人へのねたみが生じ、神の「気前のよさ」を受け容れられなくなりました。人のよこしまな目には、神の〈善〉〈完全さ〉が正しく映し出されないからです。

「ぶどう園の労働者」のたとえでは、一見「この最後の者」の存在が、神の「気前のよさ」を通じて際立たされているように思われます。しかし、「主人を見出せない」あらゆる人々が、ふさわしい時に主に招かれており、主のほうから「子よ、お前はいつもわたし（神・キリスト）と一緒にいる」（ルカ15:31）と宣言されるのです。主イエス・キリストは親しく、私たちに向かって「友よ」あるいは「子よ」と呼びかけておられます。大切なことは、この主の語りかけが聴き取られるように、他には「何もしないで」、天を仰ぎ、立つべきところに立っているかどうかです。

神の〈善〉〈完全さ〉において、神に招かれたすべての人に支払われた「一デナリオン」が、一日の賃金に当たるということは意味深長です。

信仰をもって「澄んだ目」（マタイ6:22）で「一デナリオン」を捉えるならば、それは日毎の糧であり、それは「神の口から出る一つ一つの言葉」（マタイ4:4）にほかなりません。さらに、神の言葉の真髄を問うならば、それは十字架と復活の福音です。

神から賜った「一デナリオン」が、もし、唯一・最大の十字架と復活の福音、私たちの罪からの救い（松永希久夫）だとすれば、それは、主イエス・キリストが私たちの身代わりとなって支払ってくださった代価ということになります。

御子キリストが犠牲となられた出来事において、神は私たちの罪の莫大な贖い金を支払って下さいました。私たちへの報い、すなわち、プラスとなった「一デナリオン」の背後には、莫大な借金返済額……例えば「一万タラントン」（≒数十兆円）マタイ18:24……が隠れているのではないのでしょうか。「一デナリオン」〈日毎の糧〉は、この世の経済尺度〈現金・日当〉ではなく、神からの恵みとして、私たちの手におえなかった罪に対する無償の賜物として、私たちは感謝をもって受け取るべきものです。荒れ野、すなわち、人が何も持たないところで、一人ひとりに一日分のマナ（食物）を与え続けられた主なる神は、今も生きておられます（出エジプト記16:11-18）。

かつてR.ブルトマンの父である牧師の説教を聞いた……ドイツの自分の故郷の村の……一人の老人とブルトマンが談話したことがありました。

父ブルトマンがぶどう園の労働者のたとえの説教した主日は、収穫感謝祭の、しかも、悪天候のせいで凶作に見舞われた年でした。父ブルトマンの説教の一節が、教会の一信徒である農夫の心に刻まれました。

もし、農民たち（教会員）が今――、

「私たちは一生懸命働いたにもかかわらず、ほとんど何も収穫がないのに、いったい何に対して感謝しなければならないのであろうか」と問うならば、

その答えは――、

「あなたがたが働けるということに感謝しなさい」ということになるに違いない、と。

（R.ブルトマン マールブルク説教集『現代キリスト教思想叢書11』、白水社、1980年、261頁）

或る主日に聞いた説教の一節が、農夫の信仰と実生活を支える言葉となりました。

さあ、神のぶどう園へ、あなたたちも行きなさい。

あなたが本来居るべきところへ帰りなさい。

あなたがたが働けるということを感謝しなさい！

神のぶどう園で、神の園で、神礼拝を中心とする生活の場で、働けることを！

今、私たちの目には、顔と顔を合わせて見るように（コリントの信徒への手紙 — 13:12）はっきりとは神のぶどう園、天の国が見えないかもしれません。しかし、私たちには、その天の国の前庭として、十字架の立つこの場所が、茅ヶ崎香川教会が備えられています。ここで朝、神の招きに応え、礼拝〈聖なる一つのかけがえのない働き〉に集中することによって、神の園の良き働き人とならせていただきます。そうして、主は私たちを、さまざまな働きの奉仕者として派遣してくださいます。